



「体育大会」

from 豊山中学校

九月二十六日、豊山中学校第六十六回体育大会が、「限界突破 自分を信じて挑戦しよう」の入り口・ガンのもとに行われました。九月に入り雨の日が多く、練習する時間があまりありませんでしたが、勇ましくやる気のみなきる行進を見たとき、改めて豊山中学校の生徒達の底力に驚かされました。開会式では、選手を代表して3年A組の田村一真君が力強い選手宣誓を行い、競技に向かう心意気を示しました。

午前中は、各種競技が行われ、クラスメートを生懸命応援する姿が見られました。本年度より行われることになった部活動対抗リレーには、先生チームも出場し、盛り上がりを見せました。午後からは、各学年の趣向を凝らした学年競遊が行われました。続いての綱引き・騎馬戦が行われている時に、雨が強くなり、残りの競技は二十八日に延期となりました。

二十八日は天候に恵まれ、多数の保護者の皆様が見守る中、騎馬戦以降の残りの競技が行われました。体育大会を振り返ると、特に綱引きと騎馬戦が印象的でした。生徒達の全力プレーと観る人の応援とが相まって、会場全体がまさに一つになって、大変な盛り上がりを見せました。

勝っても負けても、お互いに全力を出し切ったことをたたえ合い、すがすがしい雰囲気の中に体育大会を終えることができました。

体育大会が終わり、今は文化祭に向けて、どのクラスも取り組んでいます。実りの秋にふさわしく、各種の行事を通して、一人一人の生徒が感動という名の想い出を胸に、力強く成長することを願っています。



私の航空史

岡野允俊

世に心配の種は尽きまし

過般、子どもが生まれた時、若い母親が言った。(こんな時代に生まれてきて、この子が生涯幸せに過ごせるか心配だが)と。

江戸く明治の頃の親は、我が子の行く末をどのように心配していたであろうか。大政奉還く明治維新へと新しい時代を迎えるにあたって、この先どんな生活が待っているのか誰も予測のつかない時代にどんな生活を過ごすであろうか、平穩無事に過ごしているであろうか、と一抹の不安がよぎったであろう。そして激動の明治も終わり、モダンな大正時代を迎える。この大正時代のほほと過ごし得たのはわずかな期間で、その間に文明、文化は西欧の風が吹き込み、大正ロマンの生活をしていたと思う。しかし、やがて昭和に入り、世界列強に伍していこうと躍起になっているうちに世界不況という風をモロに受け、厳しい時代に入った。これらの波から抜け出すため、あるいは列強のアジア進出、ロシアの東進に備えて日本は朝鮮を併合、眠れる

獅子が目覚めさぬうちに清朝の末裔を立てて満州国を建国し、ロシアの南下に備えた。やがて富国強兵策に伴い軍備の増強に入り若者は兵隊に駆り出され軍需産業も多忙になった。満州事変、そして太平洋戦争へと突き進み若者は否応なしに戦争に駆り出された。標的になるのは若い男子ばかりでなく、女子も銃後の活躍が期待され、産めよ増やせよはもちろん、男子に代わって就業を義務付けられ、のんびりと花嫁修業をというわけにはいかなかったが、ここまではまだよかつた。

(お国のために戦い、戦死し、働き得ることは名誉なこと)と励まされ、本来の人間性を無視し送る方も、送られる方も涙も見せず戦地に赴いていった。だが戦局も不利となった昭和十九年頃から青少年が祖国の危機に身を投じ、特攻に殉じ、からだを張って国や親兄弟や同朋の盾となった。

こんな時代の親はわが子の明日をどう思い考えていたのであろうか。こんな観点からみて昨今の中、韓、口との領土問題、ナシヨナリズムの問題等々不安な時代に我が子の行く末を案ずることは、かつての心配とは大いに異なるが心配の一つには変わりなからう。人間生きていくためには大なり小なりの不安はつきものである。心配の振幅が大きくならないことを願うのみである。